

産業の精神健康管理に関する研究（一）

宇 尾 野 宗 尊

序 説

- 一、労務管理論の推移と精神健康管理の必要
- 二、近代精神衛生
- 三、精神健康と精神障害現象
- 四、産業と精神不健康の原因
- 五、産業能率阻害要因の生理及病理学的考察
- 六、精神的不健康要因と排除
- 七、産業と精神健康

序

今日、科学技術の進展に伴い、人間生活を如何に合理化すべきか、又科学文明合理主義下、人間自体は如何にあるべきかは、我等の直面する問題であり、これを解明せぬ限り、人間社会に予想外の齟齬が起り、到底幸福等期待されぬことは明白である。

蓋、科学は「他の条件が同一ならば」と云うあり得べからざる仮定、もしくは、「この見解が正しいとすれば」と

云う自信なき無責任な前提の下に結論を求めることを常とするから。斯して現代科学合理主義の蔓延にまかせるなら、古来、東洋の総合的考察は影を潜めて、分析的偏見・近視的・一方的概念の独走に終始する結果、人は自から作った科学の生んだ魔の子に苦められる自縄自縛に陥る外はないのであるが、知りつつ如何ともし難いのが現状であるまいか。実に科学文明こそ、人間によって生み出され人類幸福の為に活用さるべきにかかわらず逆に人間が科学技術に駆使され、その重圧酷使の下、戦々競々として蠢動する様相は、正に悲哀そのものであるといえよう。由来、科学は、人間の活用するものなること議論の余地は無い。ところが科学の奴隸となって苦む原因は何処にあるか、いわゆる精神と科学の分裂に存する。抑々精神と科学の分裂は人間自身の分裂である。即、欲求不満・ノイローゼ・ストレス等の文明病が近来頗る増加し、特に技術革新・オートメ化に依り最近米国では年間二万に近い自殺者を出すといわれ、我國でも昨年二月証券会社の女子パンチアールが（会社は、不斷に妙なる音楽を流すなどオートメの悲劇たる作業の）単純孤独に由来する精神緊張の緩和に努めたと云うにかかわらず）白昼ビル四階から舗道に飛降自殺を遂げたという犠牲の気憶も消えぬ間に再び同様の惨事が続いたとは悲惨の極みである。

一、斯かる情勢の下、優勝劣敗、適者生存を目的とする経営競争の複雑化と残忍性とが作業や職務に反映しかつ、社会環境のコンプレックスから若い女性が生きる希望を失つて死に行くことを思えば痛痕言うところを知らない。科学技術革新は果してかかる面を予想したか或は仕事能率向上に對する些少のパーセンテージとして歯牙にかけぬ残忍性を示すのであろうか

仁戸田文学博士が人間経営学を提唱された事は誠に意味深いものがある。博士はいう「メカニズム文化の合理主義による技術論では、不十分であり、そのようなものは最早底をついて居る感じが強い。トップマネージメントとか、ゼネラル・マネージメントといわれる術語は経営学上のものであるが、それは最早トップでもなければ、ゼネラ

ルでもない。仕事上の経営学は、片側通行と化しつつある。現代では、人間そのものを経営することを学ぶ必要があるのではないか。……中略「現代合理主義のメカニズムから人間精神の若かさを取戻すだけでなく一層若々しくする為には、合理主義を内在的に止揚する試みこそ必要であるまいか。」

こういう意味から、是まで問題とされなかった人事管理中特に従業員の精神健康管理を考究することとした。

一 労務管理論の推移と精神健康管理の必要

A 従来の労務管理 従来は、事業経営の目的を単独経済（企業）の収利性に置き、この方向に人と物とを結合した。従って、経営管理は、全体的観点に立つが、人事管理と物財の管理は、二次的意義をもつに過ぎなかった。それ故、人事管理は、全体的意味の生産管理乃至業務管理と同列に論ぜられることなく、労働は経営生産の為に外部から参加（買入）したもので、労働者は、機能と離れては理解されなかった。

B 現代の労務管理 ところが、現代事業経営は、社会経済の需要する給付（商品・勤労）の生産と・供給を使命とするが故、所謂「公私企業」接近の原則に基き、経営管理には、単独経済そのものの独断的合理性はあり得なくなった。即、労働者も家庭なる経済生活を営み社会経済の一員であって、経営体と直接には無関係に独自の生活をして居たのであるが、適々その経営体の生産に携へることにより経済的に組織され、人間集団の一員となったのである。^(二)

一、それ故、今日の人事管理は、単独経済目的と社会経済目的の調和の下になされねばならないのである。

C 精神健康管理 斯く現代の労務管理中、人事管理（management of human-^r）において、労使は、対等、労働

者も経営者も共に経営の主体であり、何れも精神と・感情を持つものとして人間の尊厳性を認められる。従って経営者は、これまでの単なる能率至上主義の合理観を反省止揚して労働者を正しく理解することにより彼等が進んで規律を守り、勤勞意欲を昂めて生産に協力し得る様管理せねばならない。この意味から現代人事管理は、従来の勞務管理において看過された労働者（経営者指導者を含めて）の精神健康を管理する必要切なるものがある。

二 近代精神衛生

A 意義

人間は、身神両面の生活を為すのであるが、人の身体は複雑な構成であるとはいへ、精神においては、更に怪奇ともいふべき関連に支配されており、又、身体の故障と精神の障害とは相関連する。斯くて健全な生活活動を維持發展するには、身体の衛生以上に精神衛生（精神健康管理 Geisteshygiene）が考究されねばならない、然るにこれまで、科学の名の下に身体の衛生には相当考慮を払いつつ精神科学は、文芸復興以来等閑に附せられ、特に終戦後、占領政策として教育にも精神面は輕蔑禁止した為、精神衛生といえは精神病・神経病の予防を中心とし、精神的健康状態を一面的に保持する技術に過ぎなかった。ところが、最近漸く散見する異常行動（非行）⁽¹⁾や病的性格・能率低下等は、いわゆるフラストレーション（frustration）⁽²⁾並に諸種の精神葛藤に職由することに醒めた結果、出来ればその、惨害を未然に防ぎ止したい。そのため不斷に變移する環境に対処して動することなく一切の顛倒を遠離（排除）して着実欣然と生きるに足るよう、精神医学・心理学・社会哲学等の協力を得て行ふ精神的配慮と・実践を総称して精神衛生と呼ぶに至った。

一、日本全国昭和三六年度受刑者総数五五、〇〇〇人中、精神障害者一四、七％、少年院收容者九、二〇〇人中精神障害者二七％（犯罪白書に依る）。又、最近警察庁発表に依れば此半年（三七年）間に未成年者犯罪は昨年同期に比し一六％増成人犯罪を上廻る。

濠洲学者の日本青少年危険観　濠洲キャンベラ大学東洋学科助教ジョイス・アクロイド女史は九月二五日（三七年）公開講座の講演において「日本の若い世代は、今やジャズに浸り・セックスとレジャーの囚となつて居る。日本の社会は今強烈な白痴的要素の横行に対策なき状態である西欧かぶれは、日本にとって重大危険を及ぼす」と述べて居ると云われる。

二、フラストレーション　これは、本来失敗・蹉跌・挫折の意味であるが、心理学上、欲求不満・阻止すなわち、欲求が外界の妨害あるいは心の抑制に依り満されず不満のままに残る状態に用いられ、人間の異常行動や病的性格の発生を、この現象から説明せんとするのである。

B 精神衛生運動の沿革

精神衛生運動は、一九〇八年（明治四十二年）夙に、クリフォード・ビアーズ（Clifford Beards）に依り着手されて以来、経済の発展科学技術の進歩に伴う人間感情の緊張・社会的摩擦の結果たる人生悲劇を回避する為の協会委員会創立に始まり、世界精神健康連合（World Federation for Mentalhealth）の組織に進展し、教育・産業の他、生活の各分野にまで拡張されたが、産業部面は、他に比べて、遅れて居る。我国では、昭和二九年（一九五四年）精神衛生普及会が発足したものの、初めは世人の注目を惹くに至らず苦難の途を辿りつつ産業面に活躍を開始して、或は入社試験に協力し、或は適性配置に際し、精神状態の調査に従い、或は職員の家庭指導において歓迎される等、幾多の功績を挙げた為、次第にその重要性を認められるに至った。偶々一九六〇年（昭和三十五年）は、世界精神衛生年として国際的に精神衛生活動が推進され、日本を初め、四三ヶ国九一団体が参加して、それぞれ、社会経済的条件に應じて活動を開始し、精神病者の治療のみならず、子供の精神発達並に職場の精神衛生等の研究を一斉に行つて精神衛生運動を促進した。かかる風潮の

下に、我國社團法人精神衛生普及会は世界精神衛生年日本委員会として、心理学者・精神病理学者等の協力を得て、我國の社会経済的条件に従つて、職場の人間関係改善を旗標として職場や家庭の精神健康を保持発展することにより生産性の向上、労使改善に奉仕している。

三 精神健康と精神障害現象

世界保健機構 (World Health Organization) によれば、健康とは「身体的・精神的・社会的幸福 (wellbeing) の常態」をいう。まことに精神的健康とは、精神活動が良く行われ、或は行われ得る状態をいう。換言すれば、精神的諸機能が均衡を得て、生活の諸条件と調和して活動する状態を指す。翻つて人間の健康には、物心両面共自然に即した生活（前記環境に順応して多らかな気持）を営むことの必要は、東西古今を通じて普遍妥当する真理である。ところが、現代人は、機械装置・環境をなるべく自己の快適満足感と一致させんとして、しかも過度の欲求をする。従つてその満たれた部分に対しては僅かに満足を感じ、満たれぬ場合には強き不快を感じる。それ故常に快感を追つて生るのであり又ここに人生の意義を見出している。しかもその欲求が人間の基本的活動（食欲性^{欲等}）であれば、一層強烈である点、人も風も選ぶところがない。人間が未開の場合欲望は単純であつて比較的容易に満されるが、文化人は複雑無限の欲望を持つが故、満されない。その上、人は特に快感満足感到弱く、享樂・アルコール・性欲・金慾の満足求めて無理と知りつつ行動し不正、犯罪さえ辞さない。蓋そこに恍惚感があるからである。

斯く文化人の慾求は複雑無限なのに対し、資源も勤労も有限でありむしろ満されぬものが多い。^(一) この欲求不満

(frustration)は理性・知性(脳の新しい皮質の司る)を以て抑制しつつ道義的・社会的に生きねばならない。茲に自然に即した生活を享受し得ない所以があり、文化人として緊張(我慢忍耐の連続か)が起る。この緊張を弛めることなく鬱積するに委せた場合、本能を司る脳の古い皮質は、緊張に堪えられずして歪みを生じ精神障害を来し、時に診断の結果、異常を認められぬにかかわらず苦痛を訴え又真正の症状を醸す。即、記憶の減退、判断力衰頹の外、怒り易く飽き易く時に非行を敢てするばかりでなく、遂に自殺にまで迫込まれることがある。

一、社会的には、向上意欲不満、所得給与の不満、享樂欲不満等、家庭的には、親子・夫婦・兄弟関係の不満等、職場的には、上司下僚同僚間・仕事・待遇その他条件の不満等

精神障害現象　精神障害者は、表情・言語・動作・服装等に異状がある外、勤務状況不可(遅刻、早退、欠勤、怠慢等)・不和(非協力)

立抗争)
中傷等)・低能率・秩序紊乱(規則命代違反)等業務の集団生活を阻害するのみならず、不健康者自身も常に不快・苦痛に見られる。

斯く人間幸福の基礎であるべき精神健康が肉体の健康に対する配慮に反し殆んど省られない事は不思議である。

四 産業と精神不健康

精神的な健康については、大体直前述べたごとくであるが、その原因はこれを素質等の内的原因と・環境等の外的原因に分けて考えられる。

A 内的原因

a 素質　素質とは人の遺伝的性質をいうのであるが、人格構成の要因から見れば、幼時の経験を初め、後天的産業の精神健康管理に関する研究

に形成されるものを含み、これを外向的性格と・内向的性格の二類型に分けられ、職務的適性から配置を考慮するべきである。

(1) 外向的性格 この性格の従業員は本来・外部的仕事に関心を持ち、陽気で社交的であって何事にも反応の速度が高い。従って斯く活動的で変化を好む者を事務室に閉込め、終日伝票整理や記帳等に当らせれば漸次憂鬱となるのは自然である。

(2) 内向的性格 この性格の従業員は、心が内面に向い、消極的・非社交的であって、孤独を好み、何かの刺激に遇った場合、これを外部に現わさず、中に抑えるという自己抑制的傾向が強い。かような者を渉外面(営業・外交等)に使用すれば、外部で種々の型の人と折衝することを嫌う為、漸次憂鬱となり、非能率なばかりか遂に精神障害を引き起こことになる。又直接精神的なものでなく、身体的に職務に不適当な場合(例えば力の弱い人が重労働に服しその強制せられる等)も疲労度甚しくその繰返さるに従って精神障害を引き起こすこともある。

要するに性格の差を考慮して適正配置を行わぬ場合それが精神症の原因となるといえる。

b 作業条件 作業には、一般に、施設・用具・順序及作業者の姿勢動作等に不合理があれば、不快・苦痛から疲労を速め、又労働の継続も肉体の疲労を通して精神的障害を結果する。

一、規模・組織・広狭・照明・湿度・換気・労働時間・休養等の調整された施設に加えるに合目的な用具を使用し、高所の作業に足台を置き低位の作業にも正姿勢を以て労働し得るよう工夫され、かつ整然と働ける場合と・不合理な施設背伸び前屈みでしかも無意味に往復する仕組に比較するときは単に非能率の問題でなく、精神的苦痛として重要な問題を残す。

C 待遇 待遇(給与等)も労働条件の一つであるが、不適正・不明朗等から使用者の家族を殺傷し、時に昇給

から強烈なノイローゼに罹った例がある。

d 家庭環境 神経症は家庭環境・家族構成と密接な関係を持つ。某内科医を訪問した患者中 $\frac{1}{3}$ は神経症で、その中80%は家庭不和、その内訳を見るに、親子関係、30%夫婦関係25%、嫁姑関係僅5%（ただし農村25%）

一、親子関係は、新旧思想の隔絶・道義観の推移・民主思想の影響・父母の孤独感と依頼心・夫婦関係は、男女同権思想・男性の我儘頹迷、妻の対立、理解協力欠乏、嫁姑関係は、別居の多い為で都会に少く農村に多いことは同居の為めと考えられる。これによって、家庭環境の悪いところ即、親子・夫婦関係の不円滑なところに精神障害・神経症を起し易く、又作業能率低下、災害の原因となることを知られる。

e 環境と精神衛生（精神健康保全策）

熟考するに環境は、結果現象であり、決して偶然でないことが多い。

その煩悶に対し即時回避改善されれば幸であるが、その出来ぬ場合、漸次改善さるべきだが、それさえ不可能なものもある。これらには一応順応して猥に屈託して思詰めることから脱却することが肝要である。なぜなら「無駄な心遣い程精神を疲労させ、精神衛生的に悪結果を招くものはない」、これに反し何事にも執着せず淡々と受流することが出来れば一時の緊張も忽ち氷解し、大脳の新皮質における歪みは自然回復し脳細胞が復活するからである。斯様な意味から修養信仰等に依り人生を達観することは意味あることである。
(二)

一、又、忙中、一時でも無心の子供と遊ぶことも精神障害を予防・緩和する方法である。蓋、安心して頼られ、頼らせて居るという天真爛漫な気持本能的心境が全身を支配するから。況して仕事もせず考え込んだ時等は体駈を動かさず、精神だけ使い続ける身神の不均衡に依る緊張の齎積が起る。かような時精神酷使を中止して身体の運動をすることに依り、緩和し・漸次調整されるからである。

斯様な意味から、家庭相談（家族計画・葛藤処理・疾病）
（懊悩・生活指導等）職場相談等に依り生活の円滑化を図れば、非能率の大部分は回避され、少なくとも回避脱却の方向を採るのであり、作業条件待遇等の不満は、合理と公正を旨として処置し、誤解・疑問は早急に取上げて解明を行なうなら精神障害疾患に根源を除き得られるであろう。

B 外的原因

欲求不満とトラウマ 日本人は古来内心高い理想を持ち、すべてに完璧を期する欲求が強く、几帳面・律義的であるだけに、今回祖国が空前の大敗北を喫した為、内省的に傾いて自信を失い（自己不確定性）、特に運命を素朴な態度で受流すことも出来ない特質上、勝利欲求不満と云う絶大な衝撃を受けた上、他国の占領下、政治・経済・思想から教育迄悉く屈辱的支配に服さねばならぬ關係で俄然虚脱状態に陥り恐るべき劣等感に憑かれた時、恰かも第二次大戦に対する責任と罪悪感を一方的に押付けられ（英国識者は有色人種亡国民根性に下落した。更にロケット威嚇（rocket-rattling）に日も尚足らぬ悪魔行為が繰り返される結果、原爆体験者として嘗って精神的に蒙った外傷（trauma）が蘇って自棄的の徒を生み、不健全社会・無責任時代を現出したと云えるメーヨウの所謂アミノック（anomic）に陥った。）

一、非行者慰問説 「非行者の激増は占領政策の結果であり、短見無知の徒が犯罪に駆り立てられている。彼等は犠牲者として憐むべきである。憎むどころか寧ろ鉄窓の慰問せねばならない位である。」と

b 人間喪失と緊張 人間本然の相は魂であり、その具現は肉体であって、その機能が人間の活動となって現われると云えよう。それ故、健康と幸福は、身心の均衡を得た利用に俟たねばならない、ところが、戦後、一般に家の觀念の崩壊を始めてとし享樂・道義觀が著しく変移し、人は生活合理化の名の下に些少でも己の意に満たぬものはすべて非合理・非能率として排斥し、ただ目前の快樂と利益に汲々として他人・社会の存在を無視する傾向にある。之が戦後の

民主自由である。それ故、経営者側は一方、熾烈を極める階級斗争の鋒先を巧みに交わし、他方生産コストの引下を以て競争者を打倒する両目的の下、経営革新を画し、従業員の肉体的、精神的価値（創意・工夫・熱練誠意等）を不要とする作業の分解単純化と・自動化を図る為、従業員は、オートメ化した広大な工場事業場にあつて悉く機械装置と作業の流れの中で働き計器の指針を注視し、或はキーを凝視して一瞬の油断は勿論、心の裕さえ認められぬ、所謂魂なき或は生命も感覚も持たない物質（機械・歯車）として黙々労働することを強要され、人間の建設本能も熟練もすべて無きロボット化させられる。斯くて経営者は予期の成果を挙げようとするのであるが、人間有機体は、人が知性で完全に理解するには余りにも複雑微妙な生物であることを忘れて居る。斯くて人が機構の中に全く人間性を剥奪された場合に孤独と緊張に堪えられるものではなく身神の違和を生ずることは当然で、現在の犠牲は寧ろ少なきに失する感があり、精神上放置すべからざる問題と云える。而も緊張と過勞の感受性（Rezeptivität）⁽¹⁾には個人差（individuelle Differenz）⁽¹⁾があり特に感受性は人の性格を基礎とする外、健康・生理状態等に依るが、心の不安・仕事の不適性・同僚に対する感情就中、上司の不公平・無能力に対して抱く悪感情の影響を受ける等心理的影響の大なること無視出来ない。⁽¹⁾

一、従業員の個人差 作業最良の方法を心理学的に考察検討すれば、従業員にも銘々個人差がある為、動作の基準的要素（又は単位）を綜合するだけでは、理想的成果を挙げられもれるのではない。それ故、個人差を看過し仕事の自由を認めない時は全的に合理的効果を挙げられない。従つて最良の方法を定めようとするば、従業員の立場と・生産の合理的標準という立場の双方から考究せねばならない。

二、生理的に叙上の原因は、胃液の酸度を増すことにより胃の血管は負傷し易くなり遂に胃壁の傷害を経て胃潰瘍を誘発することがある外、不安焦躁・恐怖等のストレスは肝・腎・脳・脳下垂体の消耗、機能障害を来し健康を害する。

五 産業能率阻害要因の生理及病理学的考察

産業上の災害・事故・能率の減退等は、其直接原因として、環境 (environments) 作業そのものの性質・作業者の肉体的疲労を挙げられるが、従業者は、肉体的疲労ばかりでは病気になるものでないことは注意すべきである。故にここに精神の宿る脳の働き及これと密接の関係にある内臓を通して精神障害 (神経症) を考察することとする。

A 精神的障害

a 脳 精神の宿る大脳皮質は、新しい皮質 (理性・知性を司る) と・古い皮質 (本能の働きを司る上、ろ、) の二重構造である。而して「新しい皮質の活動は、視床下部 (古い皮質なる、) を媒介として古い皮質に支えられて居る」それ故、本

能的心の動き (大脳古い皮質の機能) は、理性・知性に依り、大なり小なりコントロール (抑制) される。而かも社会の進歩と共に生活の複雑化が加わるに従って愈々甚しく、その抑制が反復されれば、遂に古い皮質に歪み (ストレス) を生じる。ところが、自律神経は、亦視床下部の支配を受けるものであるから、ストレスは、視床下部に影響して自律神経の機能を狂わせ、その支配下にある諸器官 (胃腸・心臓・血官肺・腎膀胱等) の故障となって現われる。 (時実教授による)

b 間脳 間脳は、人間の感情を支配する器官である為、その機能が円滑に行なわれない時は、焦躁・不快等の現象が起る。逆にこれ等の心境が甚しいか又はそれが継続すれば、間脳は害されて機能が衰え感情の支配を困難とする為前記の現象が起る。即両者は相関関係にある。

c 脳下垂体 脳下垂体は、単に下垂体とも云い、間脳下に垂下する蚕豆大の器官で、前葉・中葉・後葉の三部分からなり、ホルモンの分泌を調整する作用をなす。それ故、ホルモンの分泌が正常であれば、脳下垂体が健全な証

拠である。

脳下垂体の前葉から出る成長を促すホルモン（生殖腺刺激^{（生殖腺刺激）}）は、甲状腺の働きに強い影響を与え、人が著しい恐怖（例え^{（例えば戦争の場合）}）に襲われて、不安・焦躁・刺激過敏・活動不安定等が起れば、甲状腺ホルモンの分泌過多を通して注意力散漫となる。独医バゼドウ（Karl Basedow 1799-1854）は第二次大戦下、諾威女性の多くが戦争恐怖からバゼドウ氏病に罹ったことを研究して著名であるが、症状として神経系の興奮として交感神経刺激症状や身体各部の振戦等が見られる外、精神症状は多種多様であるとされる。

予防 同症予防には、著しい恐怖に基く不安から焦躁・刺激過敏・情動安定を来す事なからしめるにある。

d 肝臓等 又、人は活動に依り、体内に毒素の発生を見るとはいえ、これに対して肝臓の健全な場合には、解毒作用も順調になされ、新陳代謝が活潑に行なわれる結果、容易に疲労を覚えないのである。ところが、肝臓が不健全な場合は勿論、仮令健全でも、不安・恐怖に戦き焦々するか・激怒する等心の動揺を感じた時には肝臓の働きは害され毒素の排泄を妨げる為、容易に疲労する。^{（二）}

一、肝臓の健康と心の余裕（精神管理）

斯くて肝臓の健康を保持することの必要性から逆説的に、産業における従業者は先、生活の安定・安住を約され、経営合理化に基く、恐怖・怨恨焦躁激怒等心の動揺を来す素因を除き、更に熟練・努力・注意に報いられるに至れば、他の要因と相俟って肝臓は健康に保持される為、自然疲労を少くし生産能率の向上と幸福を結果する。

e 結び 以上から人は、生活上、有機体として肝臓に限らず、大脳を始め、諸器官の健全性と著しい心の動揺顛倒、これに伴う精神障害との間には極めて微妙な相関関係に立つ（相関医学）ことが理解される。

産業の精神健康管理に関する研究

それ故、健康と幸福（当然能率に直結する）には、物的欠乏・不安・恐怖を除くことを要する。併、無限の欲求は有限の資源と勤労では満し得ない。ここに物的配慮の及ばざる部分は、それと並んで精神的措置を以て補なわねばならぬが之亦相關関係にあることを忘れてはならない。兎まれ、精神的には何事かに直面した場合、自我我慾の独走を脱却して、沈着冷静信念を以て事に当る余裕ある心境にあり得るよう修養するにある。その為、遠き慮をなして常に有事に備え、順境に驕らず逆境に直面して猥に焦慮・狼狽せず、怒らず・悔いず・悲まず・不快感・怨恨の如きを意識せぬ迄には達せずとも、せめて動揺顛倒を経験意識した際、直ちに又は短時間に之を他に転換（宗教では積極的に満足）する技能を体得すれば大脳皮質の歪みは緩和し激昂した感情も静まり、ホルモンの分泌は調整され健康は能率及上昇を可能とする。それには精神の糧たる道德修養講話・宗教信仰講演を聴き入信することも重要な意義があると云える。

B 精神病

a 精神分裂病 精神分裂病 (Schizophrenie, Schizophrenia) は典型的精神病であり、精神内界が二つに分れて分裂抗争して統一を欠く為、(intrapsychischeataxie) 外界に適応し得ないものを云い、精神病者の七割を占め、到る処に散見する。(一)

一、症状としては、事実あり得ない何物かが見え(幻覚)時に誰かの声が何処からか聞える(幻聴)、それが不快の為、立腹憤激する。しかも声の主を明言することさえある。あるいは此食物には毒物が混入して居り、自分を殺すものであるといつて、夜も眠らず家中を探し回る。又在宅するかと思えば突然飛出し、何時の間にか親友さえ恨み、殺さねば自分の安全が保たれないとして周囲の人を殺そうとし、その為、殺人放火逃走を企てる。結局年月を重ねて痴呆に陥るものとし、精神病理学大家クレペリン (Emil Kraepelin 1856—1926) は早発性痴呆と称したが、「必しも痴呆となると限らない」。

b 躁鬱病 躁鬱病 (Manisch-Depressives) とは、非常躁いで陽気になるかと思えば、塞ぎ込んで陰鬱になる時期

がある。蓋、程度の差こそあれ、巷間往々見受ける症状であり、交互に現れるか、又は一方が強く現われることもある。併、発揚・抑鬱の時期が過ぎれば、何の故障もなく脳の働き精神作用に根本的障害を起すことは殆んどない。

一、癲癇と共に内因性精神病と称する。これに対し、脳の損傷徴毒、酒精ヒロポン等の中毒に依る例えばヒロポンを始め各種の薬品を注射又は服用することに依って睡眠の代りに頭脳を覚醒して夜ふかし、乱行に悪用する為、自から良心を麻痺したものを、外因性精神病という。

不適當な業務 本症者は入社の際、発見されれば排除さるべきであるが、特殊の事情ある場合には、一時的発作の場合にも他に重大な影響を及ぼさない作業に就け、常に注意を怠ってはならない。のみならず機械の運転操作の如きは不向であり特に自動車、機関車運転等の乗務作業に危険極りなく、排除せねばならない。

c 精神病質 精神病質 (Psychopathie, Psychopathia) とは「身体・境遇等を調べても他に病因を発見されず、而かも自身は精神病原因があるものと錯覚する人格の異常であるが、その為、共同社会生活を妨げるか、本人自身が煩わされる所謂異常性の強いものを云う但、知能の異常精神薄弱ではない。

d 神経症 (ノイローゼ)

(1) 意義 神経症 (Neurose) は、神経の病気で欲求不満紛糾等、心の動揺が、精神と身体の働きを狂わせ、社会生活が出来なくなると云う複雑微妙な人間の状態を指すものであり、種々の心労とか精神的ショックに依って大脳が歪みを起すのである。即ち患者の心理的態度 (心の持ち方) 又は精神的加工 (つてしまう) が主因となって起る身心の異常反応を云い、直前述べた精神病質と類似する為、従来、精神病に含めて取扱われたが、現代は両者の異同を明かにし、多くの場合切離して考究される。^(一)

一、神経症と精神病質の異同

○同一なる点 両者共、病理解剖的変異は認められない。

○異なる点

神経症 神経症は患者の心理的即心因性機能障害である。

精神病質 精神病質は患者の性格そのものの異常で器質障害ある。

(2) 生活特に職場との関係、抑々疲労は、之を筋肉的疲労と精神的疲労に分かれ、後者を更に頭脳の疲れと・

気分の疲れに細分される。

頭脳の疲れは、理性や知性の宿る新しい脳皮質の疲れで回復し易い。之に反し気分の疲れは、本能を司る古い皮質に生じた歪みで脳細胞の働きが狂った状態であり、その原因として一は、戦争驚愕等に依る急激なものもあるが、通常慢性疾患・家庭不和・職場における不満の如き潜在的且継続的体験の蓄積。他は異常人格から起り易く、ノイローゼ・ヒステリー神経衰弱等之に属し、回復に時間を要するのはその為である。^(一)

一、例えば学生の神経衰弱は、多く過度の勉強に依るからでなく、寧ろ、不安焦躁が積り積った結果症状である。

(3) 神経症の特徴と種別 種神経症は疲れ易く飽き易く、注意力散漫・記憶力減退焦ら焦らして怒りっぽいのが特徴であり次の如く類別される。

症状に依り 不安神経症・神経衰弱・ヒステリー・強迫神経症・憂鬱神経症等

因に胃潰瘍十二・指腸潰瘍・喘息、高血圧・蕁麻疹・糖尿病・バセドウ氏病・婦人不感症等の中には神経性のものが多い

為、神経性疾患として挙げられている。

e 神経症的症狀 神経症的症狀とは、軽い精神障害であり、常に不安、恐怖に戦くか些細なことにも手嫌いし又は敵意を持つ外、焦らいらすることを特徴とし日常多く見られるが、注意深い情緒的な人格との差は、極めて少なく健康と不健康の境にあると云えよう。微妙な点であるが、普通人も多忙・疲労等に依り一時的に此症狀を呈するに過ぎぬ場合もあるが故、上司指導的立場にある者は特に注意を要するところである。

f 結び（対策） 前述の如く社会の進歩に伴う生活の複雑化から文化人は、本能的欲求（大脳の古い皮質の働き）を理性知性に依つて抑制するが、今次の如く、戦争と敗北に依る絶大な衝撃に継ぐ戦後凡ゆる価値体系の変革にも指導原理の確立を見ず、その上、原水爆の脅威東西緊張等到底人間精神が順応されぬものが多い上、都市人口集中に依る住宅地価の暴騰・交通地獄・建設工事の騒音・人間関係のコンプレックス等で、強力な刺激を受け、特に自由競争下、我慾を張る人間の奔き合う中、常に何ものかに追いかけられ、何かに縛られて居ると云う最も不健康な気分から抜けられない為に前述の如く大脳皮質に歪みを生じ、その継続は、自律神経の機能に狂いを起して、其支配下にある内臓諸器官の故障を結果し、各種、ホルモンの分泌調整も乱れ新陳代謝を不十分にする等枚挙に遑がない。斯く精神的諸障害は流行病の如く人皆冒かされる症状である。

文明病ノイローゼ対策として、身神の健康に恵まれる為には、努めて調和のとれた生活を送って、常に心の平静を乱さない外、脳および自律神経の影響を受ける内臓諸器官の働き及ホルモンの分泌の正常性を失なわさぬことが要請される。併、これは容易なことでないが現代社会を風靡するような単なる権利思想・個人主義観に基く作業技術並に生

活および経営一般を、哲学的・倫理的・社会的、進んで宗教的配慮を以って調整し、客観的社会的立場から事象を観察処理する余裕を持つことの他はない。而して此事たるや他の所に述べる如く単なる道德論・教説ではなく自然の法則(Naturecht (Laws of Universe))であり、社会的にも多くの人から承認され支持を受ける為、強い安心感となって良心的に畏れなく、喜びに生じることが出来る。彼の宗教家などが苦節に耐えて健康長生するは眞の愉快に生き、日々是好日と云う気魄(心の持ち方)を持って進む為であるまいか。

六 精神的亚健康要因と排除

A 概説 前述の如く、文化の進展に伴い、人は四六時中緊張状態にあり、特に技術革新、オートメ化は、富める米国においてさえ、「四五〇万人(昭和三七年一月)の失業者を出し、今後一〇年間、四、五〇〇万人(每週八万人という)の為に新職業を生み出さねばならない(ウォルター・ルーサー説)」と云われるが、容易ならぬことで、経営者にも組合に可能であろうか。仮令幸に職場に残った従業者も、肉体的労働こそ軽減されたものの、建設本能を充す喜びと満足は更になく、僅少の休憩時間を除いては、一瞬たりとも心の弛みも些少の融通性も無く、然かも仕事に正確な速度を強要されて、息つく暇さえない機構の一部分としてただ黙々働き続け、逐に磨滅して取換られる齒車のような運行で、檻の中に飼育された野獣にも劣り、人間の尊厳性とはおよそ対蹠的な取扱を受ける結果、生活の不安と無為、孤独に堪えぬものがある。ところが一面、人権思想と・文化生活は、近來長足の進歩を遂げた為、無限の慾求を生じた。にもかかわらず、経済成長の跛行から満されぬもの多く、他面、人間社会生活の中に反省・愛情・同情等心の豊かさを欠いては自我から不満・怨恨・嫉妬・争斗・憤激の泥沼に蠢動して、安心、明朗和楽などとはあり得ないが、ルネッサンス以降停滞した精神生活は物的生

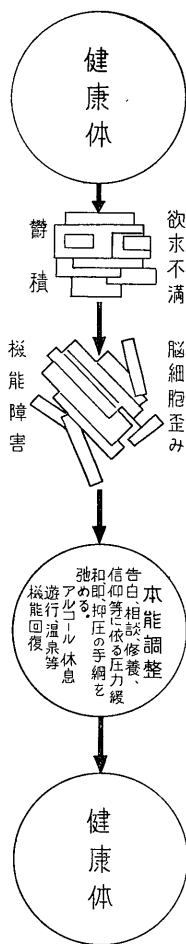
活の進展に反比例して只管、退歩の一路を辿る為、單に労働者に限らず現代人は「蝸 (Aedon) か亀の子把薬のように終日終夜全神経を尖らせ緊張に緊張を重ねて居らねばならない。従つて現実は一つや二つの原理や理窟で枳然とする程單純なものではない。そんなわけで本能の赴く儘の生活は、悉く理性の抑制に遇わねばならない結果となる。それ故腦の古い皮質(本能を司る)の歪みは頂上に達し、ノイローゼ等の精神障害 (Geistes Störung) は、近代病とされ、悪性感冒 (influenza) のように社会を風靡し愈々猖獗を極める傾向にある。そこで科学を生嚙りした大衆は、所謂進歩人と称する便乗者が「今時他人の事など考へる余裕はないんだ」と云う非社会無責任な弁護と社会一般が不道德・不法に寛大不感症であることを幸とし、ただ権利の主張私利追求にこれ努め、可及的責任義務の回避に没頭する上、不法行為さえ敢てしつつ睡み合う結果、内心常に戦々競々として懊惱するのが真相であり・その心の憂さ晴し(腦の古い皮質の歪みを弛める)を目的として、或は遊里に踏入り、深酒に酔い、或は刺戟の強い娯樂を求めて姑息的に氣を紛わすのであるが、これが却つて不安と、惡循環を來して滅亡を促進し社会を毒することとなる。蓋、精神生活未開發に基く精神不健康に由來するものと云わねばならない。

一、昨年、問題となつた大学入学生 (心身共に自信あるべき筈) の精神障害に就き、東京大学入学者二、五〇〇名中入学式前調査の結果五〇〇名(一)は、精密検査の要があり、更にその一〇〇名は治療を要することが判明した。同大学は、夙に健康管理を実施し、最初は結核対策を中心とした所、年々結核に依る休学・自発的落第は減少し初めたが、逆にノイローゼ等の精神障害に依る長期欠席者の増加が目立ち、昭和三五年度下降する結核のカーヴと、上昇する精神障害カーヴが交叉したと報じて居る。

大学当局の発表によれば「精神医学的診断の結果と・人間の価値判断とは別で、ノイローゼを通り越して明かな精神病の場合でも、適切な健康管理下であれば、有能な研究者・社会人として通用することが多い」と云う。以て精神健康管理の緊要性産業の精神健康管理に関する研究

が知られる。

B 精神障害と回復の過程 健康体が、精神症(外傷に依る)に罹り、再び健康に復する迄の過程は左の如く考えられるであろう。



「精神症は、種々の欲求不満が鬱積して脳細胞に歪みを生じ脳の機能が変調を来した現象である。」と云われる而して医療を要するものは、当然専門医に委ねる外われないが、一般には、企業のカウンセラーが、精神科医及精神健康管理者と協力の下、誠心誠意指導に当ることによって、症者は鬱積された欲求不満の圧力が緩和され、之に伴って脳細胞の歪はみ復旧、機能の回復に導くことが出来、他の**企業機関の協力**に依って精神障害の発生を未然に防止し得られるのではないか、ある程度可能であると云いたい、その手段として次の如く考究する。

a カタルシス カタルシス(Katharsis, catharsis)とは、本来、排泄(通してやる意)であり、大腸カタル等の如く、体内に好ましからぬものが侵入した場合、これを速に体外に下し出す「浄化作用」を云う。概して精神病者は、愚痴を零し、鬱ぎ込み、又は虚勢を張り、時に前後の見境なく異状行動に出るか、病的性格を示すものである。蓋、ノイローゼ患者は、苦悩の原因となった事実深く思い詰める。而も苦悩・災厄は、幸運と同じく連鎖的に発生襲来するも

のである為、複合鬱積し、一々意識に上らぬにせよ、強い感情を帯びた概念の集合所謂コンプレックス (complex) となるからである。それ故、絶大な強迫観念の憑き纏う所となり、得も云えぬ重圧・緊張に苦しめられるからである併、それが、単にその苦衷を告白するだけで、心中の毒素の排泄となり、苦悩は雲散霧消する。況して高德の士と敬せられる良識の發達した人の適切な説得に心から信頼傾聴すれば、洪面は一変し明朗快活別人の如く帰りに行くことも屢々見受ける。⁽¹⁾⁽²⁾カタルシスの効用ここにあり精神衛生上極めて重要なことである。

一、修養信仰道場・相談所等に珍くはないが、生理的変化も巷間見聞する。例えば医師が、「死見数ヶ月後乳汁分泌に苦しんだ女性に効果なき粉末を与え精神療法を施し分泌乳を閉止させた例がある。

二、家庭生活における夫婦の度量

職務と人間関係で疲れた夫に、妻の愚痴を、又、終日子女に纏り付かれる上、世帯の苦勞に疲せ細る思の妻に夫の癪癪（爆発性精神病質）に対し、心の疲れ（脳細胞の歪み）として夫妻共に理解と同情を以て聴いてやる・消化してあげると云う多らかさ（応陽さ）を養つてあれば両者のカタルシス効果は顯著であつて健康と繁栄幸福を結果する。

職場における上司　上司は従業者の不平・不満・改善意見を傾聴するだけの度量と・誠意を必要とし、聞いて貰った、打明けたというだけで、カタルシス効果は脳細胞の歪みを弛め、精神健康を回復する。但し、馬耳東風では、効果はない。従業者が上司に対しても同様なことといえる。

b アルコール

(1) アルコールと能率　「大脳の新しい皮質は、理性・知性を司る所であるが、アルコールに弱いことを特徴とする。

」さて人は生活上生ずる種々の苦難を避け、欲求を率直に充して満足するか作業動勞に従事して疲勞倦怠の前に休息し得られれば、何等問題はないが、それが出来ぬ場合が多い。その時、不満苦悩と對抗せねばならぬ為、緊張する。⁽¹⁾⁽²⁾

これが長く続くなら、漸次鬱積して古い皮質(本能を司る)に歪みを起し、身心共に疲労困憊意氣銷沈するか、焦々して心の安定を失い遂に眞の精神症に迄發展する。

一、上役下役、男女夫婦、親子・嫁姑・友人・職業地位収入等凡ゆる人間關係、その他種々の關連において無限の快樂欲求をする為である。

斯様な時、人は飲酒に依り、血液中に混入された○・○五%のアルコール($\frac{1}{2,000}$ 濃)の化学作用で、これ迄、腦の新しい皮質の働きである理性の抑圧に依る心の緊張が、弛められると共に鬱積した圧力は、低下する。それと同時に古い皮質の司る本能は放出口を見出して伸々と羽搏く為、沈鬱状態も・焦躁感も・忽ち消散して食欲・色欲のような基本的欲望はもとより、細胞機能の復活を見、勤勞意欲も昂上する。即、能率も正常化する。

一、微酔加減・一杯機嫌是であり、理性を司る新しい腦の皮質の働きが鈍つて、判断力・思考力の低下を來したことを示す腦神経の麻痺状態である。

ところで、アルコールは一概に腦神経を麻痺させると非難すべきでない。要は活用にある。アルコールは逆に腦神経の働きを促進して細胞の歪みを正し、その支配下にある自律神経の乱れを防いで内臓の働きを旺盛にする面がある。すなわち、飲酒により顔面や皮膚が赤変するは、アルコールが心臓の活動を助けて血管の末端まで血行を良くし頓に活力を増したものと見るべく、ために頭腦を明晰にし仮令一時的にせよ疲勞を恢復して熟睡の因なり、身心の疲勞を去って安眠し翌日の活力を与えることは日常経験するところである。

斯くアルコールは、適切(適量)に利用するに於いては、勤勞意欲と能率を高める効果大なるものがあり特に筋肉労働者には必需品と云うも過言ではない。

(2) 食欲の誘発 「健康は栄養豊富な食物のみで得たれるものでない」勿論、栄養は輕視すべきでないが、折角

準備された栄養食も、食欲を欠くところに全く無意味である。食欲誘発の要茲にある。

由來、食欲は、時間の経過と勤勞に依るエネルギーの消耗を補填する為、自律神経の働きで起る自然現象であるが併、環境の変化・巧妙な料理法等で五官を刺激されるか、喜びの客を迎えるか、若しくは、他人が旺盛な食欲で貧り食う様を見る時等は俄かに食欲の誘発^(一)されるものなることは人の良く知るところであるが既述の如く微量適量のアルコールが食欲を唆ることも明らかである。

一、欧米人の食欲と食卓作法 彼等は食事^(二)に当り、自分の健康不調狀況などを口にすることを「不作法」とする。すなわち、希望せぬ食物を喫められた場合にも、「消化が悪い」(indigestion)とか、「医者に止められて居る」とか「肥満するから」等のわけをいわず唯、「有難う」と簡単に辞退すればよい。これが紳士の作法である。

(4) 会食と融和、必ずしも食欲に限らないが、本能^(古い脳皮質の司る働き)を満した時、人の心は最も裸になる。^(本然の相に帰る)又、群居は、人の本能であり、談笑は、人類の特権である。それ故、会食に依り、食欲本能の満足而かも、語りつ笑いつ味い食うなら、これ迄の怨恨・憎悪・闘争等の野性も何時しか消え失せ、心と心とが、直接触れ合う絶好の機会に恵まれ、所謂、肝胆相照して談笑裡に食事する時、しらずしらずの間に釈然と了解に達することは自然である。世に云う一つ釜の飯の意義ここにある。就中、これに適量のアルコールが作用した場合、その効果を増大する。古來政治・取引・会食と宴会の用いられるのはこの為である。但士君子の活用に限ると云えよう。

一、アルコールの害惡 アルコールは効用大なる反面、それだけ害惡弊害を見逃し得ない。平生、謹直・柔順な人も一度飲酒すればすなわち誇大妄想暴言蛮勇至らざるなく、他人の迷惑は勿論、身を亡ぼし、産を破り、国を傾けた例、決して乏しくない。古來、「酒は氣違水」、「酒は性格を変えろ」等言われるが、実はこの際「古い皮質は働いて居るので性格の変化と云

えない」。むしろ本性を現わしたというべきである。

斯くて、アルコールは、その心理的生理的効用を活かし害悪の面のみを排除し、保健と能率の面から管理すべきである。併、その基盤は精神の管理にある。

C 大自然の自由享樂

大自然に遊び、大海・山川・森林・溪流を跋涉し、特に温泉に浸るが如く、風光明媚の地に自然の恵みを随時無限に享樂して妨げるものなく、一点雲なき碧空の下、思の儘行樂し、スポーツを楽しむ時、そこに老若男女貴賤貧富の別はない為、これ迄の鬱積した不満も緊張も一瞬解消して自然に融込むので、脳の古い皮質の歪は調整される。

一、温泉と精神衛生 日本人は本来潔癖であり、温浴を好むが、燃料と施設・労力の關係で、湯は到底浪費の對象とならない。家庭は勿論、銭湯でも少し無駄使すれば苦情を聞かねばならない。若、それ集団家屋や船中なら大問題である。従つて入浴にも戦々競々として使うため、満ち足りた気分にならない。ところが幸なる哉、我国は、世界有数の火山国だけに、地震の災害こそ歡迎出来ぬが、靈泉の湧出に恵まれ、一、二〇〇所と云われる。その上湯量豊かなものが少なくない。僅少の入湯税は宿泊料に加算されるが使用湯量は無制限、終日終夜随時入浴して、無尽蔵に湧出する湯を恣に使い捨てて誰に気兼ねもいない。旅に疲れた時、旅館の沸湯さえ浴して緊張を解す効果あるものを況して、風光明媚な仙境に溪流を見下し河鹿を聞き、滾々を流れ落ちる湯滝に当り透通る湯槽に浸つて上れば、珍味酒肴は我等を待つて居る。美酒の盃を傾けた時、誰か人間關係の緊張に悩み続けられようか。即大脳皮質の歪も消え、脳細胞機能は回復に向うことが必定である。

斯様な意味から季節的行樂、スポーツその他行事は、常に孤独・無為・怨恨・斗争等に悩む従業員をしてその時のみならず行事の前後時に相当長期に亘つて団結心愛社心を維持向上する上に多大の効果がある。その上これを家族に迄機会を与える時は、所謂家族ぐるみの精神経営管理に役立つが、更に此機を利用して経営者や幹部級が意志疏通を図る

好機となり経営能率の昂上を結果することは云うまでもない。

d 柔軟心 精神症要因排除の基盤となるものは、従来多くの学者経営者の看過した所であるが、夙に「西独勞組がストの経済的負担に堪えぬこと熟知」して容易に敢行せぬように「今やすべてが対立抗争の既に意義なきに至った事を悟って速かに社会連帶觀に醒め、積極的・利他的即、大乘的立場から、相互の發展と幸福の為に協力すると云う柔軟心に切替える」換言すれば経営関與者の凡てが、利己偏重・権利の主張に盲進して義務と・責任の回避にこれ努める非民主・非社会的陋劣な根性を清算し、環境に順応して、所謂「多らかな氣持（応酬な心）で生を樂しむ」と云う人生觀に徹するにある。斯かる心境に立つてこそ、真に幸福で天寿を全うし、与えられた条件で、最高の能率を挙げられる。何んとなれば利己・頑迷・猪突・猛進すれば、常に他人と衝突して不平・対立・抗争に寧日なく常住座臥心の平静はあり得ない為、生理的にも、人間活動の原動力たる「胃に靦面に影響するのみならず、自律神経の支配下に在る内臓等（心臓、腸、肝臓、膀胱及血管など）は悉く悪影響を蒙ること既述の如く医学の証明する所である。従って、精神と・肉体とが、相關關係に立ち異状障害を起し健全な経営も、労働もなく、能率低下は当然である限り、柔軟心を養うことを極めて大切であると云わざるを得ない。

一、心の平静と狭心症 苛々したり・焦ったり・興奮したりすると、それだけで、心臓の筋肉を取巻いて栄養を補給する冠狀動脈に硬化を起し狭心症（心臓を締めつけられたり抑え付けられたりするような痛みを感じる）を起す恐がある。

心中感情の嵐 又「仮令、表面上平静を装つても心中前記のような感情の嵐が起れば、同じく狭心症の発作が起る」従って次の如きことが出来る。

い 殊更に心の平静保持に努力する要ある者

ア、狭心症発作の経験者 イ、心電図により心臓診断の結果、冠狀動脈硬化を示す者

ウ 職務上、興奮又は過度の緊張の機会多き者

ろ 過食満腹直後の精神緊張

ア 急登坂 一般に過食満腹直後、急いで坂を登る時は冠狀動脈の硬化を起し易いため狭心症既往症者は注意を要する。
イ 激論・対決等で満腹状態等で演壇に立ち激論するは避くべく、事情が許せば、空腹時を選ぶべきである。すなわち団
交対決答弁等はなるべく、前以って過食満腹を謹むが良い。

は 心臓作用コントロールの効用 要するに心の平静を保持することは心臓を危険から守り強化する上に大切である。

斯くて心臓の働きをコントロールすれば狭心症ある人も、立派に仕事を続け、世界旅行にも耐えられる。(日野原医博説)
に 精神による自律神経の支配 脳神経の働きを活用して自律神経の働きを支配し得られる事もある。例えば真夜中、突如
病勢悪化、動悸早鐘の如く、これに発熱発汗顫動を伴った場合、しかも老医師院後間もない冬の夜とて、簡単に来診をそ
うことも遠慮すべきであるので、先、心を落付け、意識的に心身の平静を取戻すようにし(出来れば修養信仰の手段を用い
反省感謝すれば好都合である)更に内臓等に影響させる時、心臓の鼓動も漸次治まり平温に復し気分快復し翌朝を待つて
医師往診のときは完全に治癒したことがあり他の臓器についても例が少くない。

精神作用と内臓の關係は古くパヴロフを始め近くは米國キヤノン、ウォルフ、ソコロフ加奈陀セリエ等の発表は一般の知
るところである。

七 産業と精神健康

A 柔軟心の涵養 産業の基本的要素は人であり、人は精神と・身体(肉体物質)との構成体而かも精神と身体

とは一如である限り、精神の悩み(不調)と、身体の疾病とは、相關關係にあることは既述の如くである。殊に「感情の急激な動き(憤慨忿怒)は、それに関連する神経細胞を過度に興奮させることになる為、結局、神経組織の消耗を促進する」。ところが此「神経組織たるや再生力を持たぬ唯一の組織である外、他の凡ゆる組織や臓器を統括支配す

る中枢神経を形成するものであるが故に、神経組織が消耗（老化）し切った場合は、仮令、他の組織が健全でも寿命は尽きる」と云われる。その意味から従業者は勿論、経営関係者の神経組織に及ぼす悪影響は産業の災害非能率となつて現われることは容易に理解される。従つて斯かる危険を避ける為には、環境の如何なる激変にも動揺顛倒することのない精神健康が要請される。^(一)

一、ところで戦後、道義・哲学・宗教等が無視又は軽視され、所謂無責任時代となつて心の平静を求める事は無理かも知れぬが、政治家・経営首脳者・労働重役・組合専従者特に争議委員長等の地位にある者は任務の關係上心の平静を保つ要切なるものあるにかかわらず逆に平静は破れがちであることも止むを得ないが、何物にも替え難い生命の問題である上、重い使命を合目的に遂行する責任上思ひを致さねばならない。

a 自我克服と宗教 従つて柔軟心を保持することが必要であり、これこそ長命最高能率の秘訣であると見る者も多い。併、現代の如く生存競争、斗争に明け暮れる上、経済的・社会的に不安と・緊張に悩む人士には柔軟心を保持すること直前述べた如く不可能に近いものがある。併、これを不可能として自棄した場合、欲求満足幸福を得られるか、然らず逆に不満と・苦悩は永遠に脱却されず神経症を助長させ自から苦しみつつ社会を悪化することは当然であり社会政策も医療施設も姑息の救済措置として実効なく終るのである。夫故、神経組織の消耗を促進する感情の急激な動きを避けることは緊要であり、その唯一の途こそ、自我（私）^(二)を精神力で克服する精神修養（心の悩みを理論的に解決する方法）を為すことである。ところが、「自我を精神力に依つて克服する」ことは、言うは易いが、実行は至難のことに属する。けれども此難行は「宗教を信仰することに依り比較的容易に完遂されるのである」。^(三)蓋人は皆本来「宗教心を持つて居るが、体中深く秘蔵しており、これを覚醒さすものこそ宗教であるからである」。

一、宗教家は医者は「藥劑をもつ肉体の病氣を治療するが、仏陀はその教法を以て心の病氣を治して下さる大覺匠主である。」と説く。

二、経営は宗教であり、「宗教は経営である」バブコック拙著規範経営経済学二六頁

b 宗教の本質 詳言すれば「宗教は浮世の嵐の中に生きる人間に、是迄、人生をただ主觀的に見て盲進したことを反省させ、改めて客觀的立場から諸現象を公正に考察する心の余裕を与えて呉れる」から、嘗ては猪突猛進忽、障壁に激突し、勞多く効少なく伸び悩み続けた者も入信と共に從來の我慾一点張に進んだ非を悟って心は柔軟となり唯公正ならんとし、確固たる信念の下、事象の処理に当ることとなるので、自然相手方の理解と・協力を得、万事円滑に運び心の悩みから解放され、相應の能率を挙げられ生甲斐のある人生を享樂されるのである。続いて精神健康が産業上如何に関係するかを見ることとする。

B 精神健康と産業安全 精神健康は産業安全と密接な關係にあり産業の災害中、精神の不健康に歸するものが少なくない。

一、産業安全運動 safety movement と銘打つて、我國でも二十数年来、工場災害 (Occupational accident) の増大した特定工場における、職場障害の危険から労働者の生命を守る運動が展開されてあるがその内容は安全作業・安全装置・保護施設適正労働配置による疲労の軽減防止に努めたとはいへ、何れも身体的配慮を出でず生命の根源たる精神の面に及ばない。

精神的要素と災害率に関する調査に依れば、精神的要素 (性格) の優秀なものは災害率低く劣等な者は高い。又素質に欠陥なくも精神の不安定から生じる事故は多い。^(二)

一、交通事故と素質

I 多発者群

性格 抑鬱性・神経質・意志薄弱・激情性利己性（自己主義）

能力 運動能力……大
知覚能力……小〔無思慮に行動し失敗して臍をかむという型〕

II 無事故者群

性格 意志鞏固 共感性（共存共立性）

能力 運動能力……小
知覚能力……大〔先ず考え而して行動する型〕

これによって見るに交通事故は、知能の優劣よりもむしろ性格の如何と関連することが知られる。すなわち精神的不健康者は多発者群に又健康な精神状態の者は無事故者群に属することとなる。（昭和三十七年五月交通安全研究室調査による）

二、長い間無事故工場が不図した事から事故を起した。調査の結果工員が家庭のトラブルでノイローゼ的精神状態にあったことが知られた例がある。

C 精神健康と産業の平和 群居は、人間の本能であり、生活を豊かにすることは勿論であるが、その反面、二

人以上の存在が、紛争を醸し、悪感情を抱いて互に傷つけ合うこともある。併、それは根本に於いて精神的に健康に職由する。而かも、憤激・怨恨・家庭不和等が不健康を助長し精神症に迄進展することも珍しくはない。之に反し精神的健康者は冷静かつ柔軟心を持つことが出来るので、凡ゆる事象に対し、客観的に観察判断する余裕がある為め温情を以て協力し、協力を求めることが出来る。それ故、産業にも平和と繁栄をもたらすことは自明である。

D 精神健康と生産性 健全な精神と信念に基づく健康な身体を以て猛進する時に、初めて相応な高能率を挙げられるのであるが、従来は、一般に生産性の向上には、経営内外の合理、合目的化、施設の改善を図るに止め、経

営関興者特に労働者が、生命あり感情に支配される人間であることを看過した。ここに例示する企業は、夙に大正の初期当時米国から移入された科学的経営法を導入し、社内に能率研究部を置き、以来二〇年一定の能率上昇を見たものの、反面種々の弊に悩まされ、その改革にも幾度か妨害を受けて失敗に帰した。窮余、冷静に考慮の結果、それは、就中、従業員の精神的不健康にあり、即、彼等の自棄無頼の態度・貧窮家庭不和・不道德・改善阻害等は悉く従業員の機械視に由来することを発見し、改めて人事の基幹を人間尊厳性に置き協同者として遇し、彼等の生活の安定・安住を約し更に努力技能に應ずる幅のある給与体系を樹立し、而かも財務との均衡を図り教育指導宜しきを得た。その為、他の諸条件の整備と相俟って一躍能率五割向上に成功したと云い大正十八年パイロット専務も之を肯定した。

一 拙著 日本精神に基く経営の理論的実証的研究第二部

〃 現代規範経営経済学 37年版 二四一頁以下参照